

二千一秒物語



由乃助本舗

Fly to The Moon

月の夜 B氏が自宅に友人たちを招いて歓談していた

そのうち 明日からのヴァカンスをどこで過ごすかという話になった

ある者は

「巴里のムーランルージュで一夜を」

ある者は

「紐育でミュージカルに酔いしれようかと」

と 話し合っていたが そのうちの一人がB氏の休暇先を尋ねたところ

「これから月に行きます」

と云うや否や 二階の窓から飛び出してってしまった

翌日 一日中捜したが B氏は見つからなかった

月に叱られた話

ある晩 友人と天体望遠鏡ごしに月を眺めながら

「あの月を『月』と呼んでみると」

「なにやら格調高いような雰囲気だね」

「今度は『Moon』と呼んでみると」

「のびやかな感じがするね」

と話をしていると 月がレンズを伝ってきて

「お前たちは 月とかMoonとか勝手に呼んでいるが 俺の名前は だ」 (よく聞こえなかった)

と言いながら コツン！ コツン！ と二人の頭をたたいて空に戻っていった

告白された話

ラムネ色でいっぱいの満月の夜

A嬢が教会の前を通ったとき 後ろ（しかも上の方）から

「Aさん 僕は……」と声がして

振り返ると誰もいなかった

たれかしら 思いながら歩きはじめると 再び後ろ（やはり上の方）から

「Aさん 僕は……」と声がして

振り返ると誰もおらず 教会の上から満月がA嬢を照らすばかり

どこかに行こうかと話したハナシ

きれいな月の夜だったので 猫と眺めていた

きれいな月の夜だったので 猫に話しかけた

「どこか遠くへ 行きたいね」

「にゃあ」

夜明け前のこと

新聞配達が聞いた二つの声

「もう星を片付けるのかい？」

「ええ もうじき陽が昇りますから」

土星同盟

聞くところによると 土星同盟という結社があるそうだ

惑星に輪があるのは 土星だけであるべきで 木星にも輪があるのはケシカランというのが 彼らの主張だそうである

そんな彼らの活動が活発になるのが 数十年に一度 土星の輪が消えるときで 輪が消えるのは たれのせいかという議論になり

ある者は

「木星のシンパである」といい

ある者は

「輪をもたない金星を信仰する輩である」という

結論が出たら 皆で抗議することになっているらしいのだが いつまでたっても 議論しつづけているらしい

そうこうするうちに 時が過ぎて土星の輪が再び現れるので 彼らは落ち着きを取り戻すので 誰も彼らに対しては真面目に取り合わないらしい

と 木星のシンパのバーのマスターが笑いながら 金星を信仰する私に話してくれた

世紀の対決

今度の満月の日 マルス広場で フォボスとダイモスの対決が行われるというので 街中の噂
になっている

だけど 僕は興味がないのでよく分からない おわり

雨宿り

帰りの夜道 せっかくの酔いを醒ますような雨が降ってきたので ちょうど目にとまったバーで
雨宿りをすることにした僕は ハタと気付いた

ヤア ここはいつも客が入っていないバーじゃないか 僕と同じような雨宿りで少しは入ってい
るかな

そう思いながら 店に入ると 雨宿りをしている月や星たちで満員だった

街の灯

ガス灯の燈る道を 友人とラァラァと歌いながら歩いていると 点消方がガス灯に火を燈すところにでくわした

「ほらごらんよ これから火が燈るよ」

「どれどれ」

すると点消方がこちらを向いて

「旦那方 こいつぁ最新式ですぜ よく御覧なさい」

点消方は火を燈すではなく 長い長い棹を取り出して星を捕まえて アッというまにガス灯の中に入れてしまった

ポウッと 星色の灯りが燈った

自分に呼ばれた人

夜道を歩いていると 少し前をまるで自分のような人が歩いている
近づいて 肩をたたいて呼ぶと 後ろから誰かが肩をたたくので振り向いたら それは自分だっ
た

星を採る人

天体観測者氏によると

天から細い細い糸が垂れ下がっていて その先の小さな金具に星がひっかかっているそうだが 風が吹いたら バラバラと地上に落ちてしまいそうだが そこはうまくできていて 金具が微妙なカーブを描いていて ちょっとやさつとの風では落ちないようにできているらしい 砂漠の民が 袋のついた長い長い竿で星を採るのだが 金具をうまい具合にはずすのが 腕の見せ所らしい

「ハサミと袋をつけた長い竿なら もっと星が採れそうなものだが」

とって 友人が提案してみたが 天体観測者氏は

「採りすぎてしまうと 星がなくなってしまうし 価値が下がってしまうから 昔ながらの方法を守りつづけているらしいよ」

とって お土産の星の欠片を僕と友人にくれた

ガス灯と競争した話

寒い夜に 街かどの先のバーへ向かう途中で ガス灯に呼び止められた

「バーまで 競走して勝ったら 一杯奢るがどうかな」

もちろん 負けたら奢ることになるだろうが まさか立ちっぱなしのガス灯に負けると思えず 勝負を受けた

全速力で駆けたつもりが いつの間にかガス灯に抜かれていた

「もう一度 挑戦するかい」

と挑発するので もちろん再挑戦した

ところが 何度競争しても負けるので オカシイと思って横をみると ガス灯たちがリレーしていた

「卑怯だぞ」

とガス灯につかみかかるが 多勢に無勢 突き飛ばされて 石畳に頭打って頭の中に星がチカチカしたかと思うと 目の前が暗くなった・・・

意識を取り戻すと ブランデーの入ったグラスが目の前にあり バーのソファに寝かされていた 気付けがわりに 一気にグラスを空けると

「外の方たちからです 今のはお詫びのしるしだそうで」

とマスターが言って もう一杯グラスを差し出した

どうやら 競争には勝ったらしい

夜盗人

ある日 夜が盗まれた

最初は誰も気付かなかったが いつまでたっても夕暮れで いつの間にか明け方になっていたの
で 初めて夜が盗まれたのに気付いたのである

初めのうちは「まるで白夜だね」といっていた連中も 夜がないと困るようで そのうち点消方
が夜になるであろう時間に、天幕を張るようになった

とはいえ依然 夜がないということには変わりなくポリスから刑事 探偵から怪盗まで ありと
あらゆる者が夜を捜しまわった

懸命な搜索の結果 夜を盗んだという 真っ黒なマントを羽織った男が捕らえられた

「君 夜を返し給え」

「仕方がない お返ししましょう」

とマントを空に放り投げると たちまち夜になった

「次はこれですね」

ポケットから 青赤黄のガラス玉を取り出して 夜空にめがけて投げた

ガラス玉は星になった

「月は大丈夫だろうね」

「ご安心ください」

懐からシルバーの懐中時計を取り出して 星空に投げた

懐中時計は月になった

「これで最後です」

手にもっていたステッキを エイツと投げると たちまち見事なホーキ星になった

A Night Fog

レストランを出ると 夜の街並はすっかり霧に覆われ ガス灯がぼんやりと道を照らしていた
「深い霧だね」

「いやいやこれは雲が街を散歩しているのさ」

連れが霧に手を伸ばすと ドロップが数個 手に握られていた

HOTEL STARS

星を追っているうちに 西のはずれにきてしまい 気がつくとな大きな洋館の前に立っていた
「HOTEL STARS」
と入り口に書かれていて 星が入っていく
こっそり後をついていくと 次々と星の明かりが消えてった
そして最後の星の光が消えた途端 朝になった

An Eclipse of the Moon

――才月様ニハ 弟ガイル
――弟ハ 兄トチガッテ 夜ニ隠レテシマッテイル
――兄バカリ チヤホヤサレルノデ
――クヤシイクヤシイ 弟ハ
――トキタマ 兄ヲフサイデイル

密造酒の秘密

お月様が満月になれないので 不審に思い探偵を雇って調べた
月光酒を密かに造る連中が増えてきたため 月光が搾りつくされてしまっているということだっ
た

そこで月光酒を造ることが禁止されるようになったが なにぶん 月の光でできた酒を一度味わ
ってしまうと ウィスキーもバーボンも飲めなくなってしまうものらしく ますます密造酒が造
られ ますますお月様は細くなってしまった

満月のない夜も困るので 捜査に乗り出したポリスにより次々と密造者は摘発され お月様も少
しずつ元に戻っていったのだが それでもまだ月光酒は出回っており お月様は再び細くなるか
と思われたが 不思議なことに 何事もなく満月になることができた

そしてとうとう 最後の密造者が捕らえられ 密造酒を調べてみると 月光を封じ込めたガラス
玉が酒瓶に入っていた

それ以来 お月様公認の月光酒がでたかどうかは たれも知らない

会議

その青年は次の日に重要な会議出るらしく 前日はさほど飲まずにバァ出た
翌日 がっくりと肩を落とした彼は あおるように次々と杯を空けていた
気になって理由を聞くと
千年に一度 星座の位置を決め直す会議で 彼の画期的な案は通らなかつたらしい
提案書を見れば たしかに画期的だったが いまさら星座を変えられても誰だって困る
そういうことは 一万年に一度で充分ではないだろうか

星の夜

店に入る前 街灯の上の空は 星でいっぱい

「今晚は冷えるね」

「雪が降るかもね」

店を出ると 雪ではなく 星が積もっていた

主張

ほうきぼしは 夜空をスーッと横切っていく様が ほうきのようだから ほうきぼしと呼ぶらしい

でも考えてもみなよ ほうきって掃除をするための道具だろう？ 俺にはほうき星が夜空を掃除しているようにみえないんだよ

だから ほうき星のことを ちらかし星 と呼ぼうと思うんだけど どうかな？

廊下でお茶を

アフタヌーンティーに アールグレイとパンケーキ

ところが どちらも相性が悪いらしくて パンケーキの方がふくれだした

部屋から追い出されるほどふくれあがってしまい 仕方がないので 廊下でお茶だけ飲んだ

Catch The Rain

こんな雨の日に窓から
コップを差し出すと 水が
空缶を差し出すと ドロップが
籠を差し出すと ガラス玉が
いっぱいになっているのは ご承知の通り

では
ウオツカの空瓶には なにが入るのだろうね

Catch The Rain

こんな雨の日に窓から
コップを差し出すと 水が
空缶を差し出すと ドロップが
籠を差し出すと ガラス玉が
いっぱいになっているのは ご承知の通り

では
ウオツカの空瓶には なにが入るのだろうね

明るい星は数多くあれど 金星はまた格別
星が帰る明け方には いついつまでも
星が訪れる宵には 誰よりも早く
美しい姿を現しているのです

金星の信仰者の私が 木星のシンパであるバーのマスターに説明したのだが 彼は少し笑って何も言わず ジンライムのグラスを差し出した

ムーンディスク

朧月夜の道を歩いていると 道端に歯車が落ちていた
月明かりに照らしてみると 向かい合った二つの月の描かれている
なんだろう とおもいつつ ズボンのポケットにしまっておいた

翌日の夜 月がやってきて

「昨晚 拾ったものを返していただけますか あれがないと 次の満月が迎えられないんです」
といたので 返した

何日かして 満月になるころになっても 月は満月になっていなかった

そういえば ズボンのポケットにしまったせいで 五十九ある歯車の歯のうち ちょうど満月の
辺りの歯が欠けてしまったのを思い出した

川に独り

秋の夜 月が橋のたもとでシガレットを吹かしている

通りすぎる星たちは 欄干から川を眺めている僕たちに気付こうともしない

「寂しいもんだね こんな夜は」

月が新しいシガレットに火を灯す

「賑やかな夏の星がいなくなったからかい？」

「いや 違うんだ」

ふうっ と煙を吐き出して 月は川を指差した

川面に映る 月ひとつ